

医師に「お任せします」とは言わないで

[2016年6月25日/第10回認知症地域学習会]

朝田 健太 (男性介護者を支援する会会員/京都市在住)

僕のおじいちゃんが認知症なんです今日まで10年近く介護に当たっています。家族構成は祖父・母・私・妹2人です、主な介護者は母で僕はそれを支援する立場なので、母の都合が悪い時の交代や徘徊・転倒など、主に夜間の対応を受け持っています。

2007年5月のある夜、祖父の大声で起こされました、これが認知症介護の始まりです。その後も様子がおかしいと思っていたのですが、そのままにしていました、そうしたさらに悪くなるのでその年の12月に最寄りの医師に受診したら、認知症の疑いの診断が出されました。その医師に紹介状を書いてもらい、大きな病院でさらに診察してもらい、そこから認知症治療が始まり、その病院で薬(アリセプト)を処方してもらいました。翌年からデイサービスを利用しましたが、祖父は大声出してさわぐし、夜中にうろうろして転倒するなど症状が一向に改善されません。薬が合わないのではないかと、家族で担当医に訴えるのですが、医師はとりあってくれません。そこで近所のかかりつけ医と相談して、かかりつけ医から薬の件を担当医に直接言ってもらいました、すると薬の量を0.5mgから0.3mgに減らしてくれました。その結果、さわぐことや夜中のうろうろは改善されました。医師には、こちらの状況や意見を積極的に言うべきです、薬の処方などに触れるとイヤな顔をする医師はいますが、そこであきらめると状況はわかりません、家族が納得するまでねばり強く訴えることが治療状況を改善することにつながります。



2016/06/25

2010年にはさらに大きな専門的な病院に変わりました。その病院には担当医が3人いたのですが、その中の一人の医師が認知症についてかなり専門的な知識をもっておられ、祖父はレビー小体型認知症との診断が出されました。薬もアリセプトからメマリ一に変わり祖父の状況は大きく改善されました。

2010年までは、医師が薬を増やそうとしていることに疑問があれば、薬剤師さんと相談したりして薬の増量をやめるよう医師に訴えて、増量をやめたりしたことをくりかえしていました。

2014年頃から食事の際むせるようになり、2015年には誤えん性肺炎で緊急入院になりました。その手配をしたのがその時居合わせた伯母ですが、病院にまかせきりの対応であったため状況が改善されず、さらに医師からの十分な説明がないので不安がつるばかりです、そこで介護職についてる僕の名刺を渡したりして説明を求めましたら、医師は十分な状況説明をするようになりました。

医療側とのやり取りで分かったのは、医師がすべてを理解しているのではないという事です、家族が状況を言わなければ医師も認知症治療を見誤る事は十分にあり得ます。さらに家族は介護チームの一員との自覚をもって介護に当たることです、これは本当に大事です。

(終)